

【原著】

高齢者が過去を想起することと思い出を語ることの違い：

回想のモダリティという観点から

野村 信 威（明治学院大学心理学部）

要 約

本研究では回想のモダリティという観点から、日常場面における個人的な過去の想起である個人内回想と他者に対して過去を語る行為である対人的回想を区別する尺度を作成し、老年期における特徴の相違について検討するとともに、縦断データから日常場面の回想が心理的適応に及ぼす影響について検討を試みた。

130名の在宅高齢者を対象とした分析より、6項目からなる2因子構造の尺度が認められた。相関分析より個人内回想はネガティブな感情と、対人的回想はポジティブな感情と有意な相関が認められ、それぞれの回想が異なる心理的意義をもつ可能性が示唆された。

Finkel (1995) の交差遅延効果モデルおよび同時効果モデルを用いたパス解析の結果、対人的回想と自尊満足度や肯定的回想と抑うつ度の間で有意な因果関係が認められ、日常場面における回想は心理的適応からの影響を受けると考えられた。自尊感情が低い高齢者は必ずしも自らの過去を積極的に他者に語らず、日常場面で思い出を語る行為は自尊感情の良好な高齢者により認められやすいことが示唆された。

キーワード：回想、回想法、ライフレビュー、高齢者、パス解析

問 題

高齢者が過去の人生を振り返る回想行為が心理的な意義をもつ可能性が指摘されて以降（Butler, 1963）、高齢者への対人援助手段である回想法（Reminiscence Therapy）やライフレビュー（Life review）の有効性は広く注目を集めた。高齢者による回想は単なる現在からの逃避や過去を懐かしむだけの行為ではなく、Erikson らが指摘した老年期の発達課題である自我の統合を促進するための手段だと考えられた（Erikson, 1950/1977・1980; Erikson, et al., 1986/1990）。1990年代以降になると回想法は高齢者の介護・福祉・臨床場面を中心に日本でも広く実践されるとともに、その有効性に関する検討が進められてきた（例えば野

村, 1998; 黒川, 2005; 野村・橋本, 2006）。回想法による心理的效果としては、人生満足度の増加、抑うつ軽減、自尊心の回復、対人関係の改善などがこれまで指摘されており（レビューとして Haight & Hendrix, 1995）、こうした心理的效果を媒介して間接的に認知症の予防や症状の進行を遅らせる可能性も指摘されている（遠藤, 2005; 野村, 2018）。

過去の研究では、日常生活動作（ADL）などの対象者の属性や特徴の違いから研究結果に不一致が認められるなど回想の効果評価研究における困難さが指摘され（Molinari & Reichlin, 1985）、回想法の有効性や意義を認める多くの報告がある一方で（例えば Haight & Dias, 1992）その有効性を示す実証的データは依然として充分ではない

と考えられる。また回想はすべての高齢者に効果的であるとは限らず、場合によっては回想が心理的な効果を促さない可能性も考えられる（Lewis & Butler, 1974）。

こうした指摘を受けて回想の機能やタイプを分類するさまざまな研究が行われた。例えば Webster (1993, 1997) は回想機能尺度（Reminiscence Function scale : RFS）を作成し、回想がもつ機能という観点から「退屈の軽減」「死への準備」「アイデンティティ」などの8つのタイプに回想を分類した。また Wong & Watt (1991) は、地域在住高齢者への面接内容を分析し、高齢者の回想を「談話的回想」「統合的回想」「道具的回想」など6つに類型化した。これらの研究は、心理的適応やウェルビーイング（well-being）を高める効果をもつ回想とそうでないものを分類し、心理的効果を生じさせる回想の特徴を明らかにする試みだと言える。

回想のモダリティ こうした研究の流れと異なる研究アプローチに、回想が行われる状況の違いから回想を分類する方法がある。Thornton & Brotchie (1987) は、回想が引き出された方法の違いから扱われる回想の定義や性質が異なることを指摘した。彼らは従来の回想の研究方法を①質問紙調査（questionnaire investigations）、②インタビュー調査（interview-based investigations）、③療法的回想の研究（investigations of reminiscence as therapy）の3つに分類した。そのうち質問紙調査では、回想は「過去の想起」として捉えられ、高齢者が個人的に行う回想と他者との間で行われる回想がしばしば区別せずに検討される場合もある。その一方でインタビュー調査では（方法論上の制約から）回想は「聴き手に対して語られたこと」や言語的な対話として捉えられる。そして療法的回想の研究では、回想は「特定の手続きのもとで行われた聴き手や他の参加者との対人的交流の結果」を意味し、対人援助手段である回想法の枠組みを通して経験されたことが検討される。これらの研究方法ではそれぞれ異なる回想の側面が検討されるため、扱われている回想の性質の相違を考慮した上でその意義を検討する

ことが必要だと言える。例えば LoGerfo (1980) は先行研究のレビューから代表的な3つの回想のタイプのひとつを強迫的回想だとしたが、前述した Wong & Watt (1991) によるインタビュー調査では強迫的回想は全体の5パーセント以下の割合でしか認められなかったと報告している。しかしながらこの相違は結果の不一致というよりも、強迫的回想は個人で行われる回想では頻繁に生じて、他者に回想を語る際にはあまり生じにくいことを示している可能性がある。

ところで Thornton & Brotchie が指摘した研究方法によって異なる回想の性質は、研究方法それ自体から切り離すことが出来ないわけではなく、その性質の違いを考慮して検討すれば単独の研究方法でも比較することは可能である。山口 (2004) は Taft & Nehrke (1990) を参考に、1人で過去を想起する個人内回想と他者に回想を語る対人交流的回想を尋ねる各1項目の質問項目（個人内回想「あなたは1人にいるとき、どのくらい過去の出来事を思い出しますか」；対人交流的回想「あなたはだれかと一緒にいるとき、どのくらい過去について話しますか」）を作成し、その相違を質問紙調査から検討した。そして個人内回想は主観的幸福感や現在の充実感との間で負の相関が認められたが、対人交流的回想では明らかな関連は認められなかったと報告している（山口, 2004, p. 38）。

野村・山田 (2004) は、このような考えから「回想のモダリティ」という概念を提案し、日常場面における個人的な過去の想起である「個人内回想」、他者に対して過去を語る行為である「対人的回想」、回想法の実践場面において援助手段として行われる「療法的回想」の3つに回想を分類してこれらの特徴の相違を検討することの重要性を指摘した。従来の研究では、日常場面における頻繁な回想は心理的適応の低い状態と関連することがしばしば指摘されている（例えば Brennan & Steinberg, 1984; 長田・長田, 1994）。こうした報告から回想法のもつ有効性を疑問視する研究者もいるが、上記の観点に立てば日常場面で行われる過去の想起と回想法やライフレビューなどの

療法的回想は必ずしも同一の行為ではない。むしろ回想のモダリティに注目することは、回想が行われた状況の違いから分類することで心理的な効果を生じさせる回想とそうでない回想とを区別し、対人援助手段としての回想法のもつ意義をより明確にするために有効だといえるだろう。

高齢者による回想の特徴を検討できるその他の指標のひとつに楽しい、悲しいといった回想にともなう情緒的性質がある。野村・橋本(2001)は回想における情緒的性質を測定する目的から、回想にともなうポジティブな感情や認知の程度を測る肯定的回想尺度(5件法14項目)と、回想にともなうネガティブな感情や認知の程度を測る否定的回想尺度(5件法6項目)を作成し、60歳以上の在宅高齢者208名に対する質問紙調査から日常的な回想の特徴を検討した。その結果、老年男性のみではあるが回想の頻度と否定的回想との間に中程度の正の相関が認められ($r=.525, p<.001$)、高齢者により頻繁に想起される回想にはネガティブな感情がともないやすいと考えられた。また回想に関するどのような特徴が高齢者の心理的適応をよく説明するのかについて階層的重回帰分析により検討した結果、老年期の男性において回想の頻度と肯定的回想との交互作用が認められ($\beta=.316, p<.01$)、過去をあまり回想しない者はポジティブな回想の程度にかかわらず適応的だが、過去を頻繁に回想する者はポジティブな回想が多いほど適応度も高く、少ないほど適応状態も低かった。

しかしながら野村・橋本の研究は単独の質問紙調査であるため、この結果は日常場面における回想行為が心理的効果に及ぼす影響を説明するものだと結論づけることは出来ない。その一方で記憶の気分一致効果の研究(例えば筒井, 2000)では、想起する際の感情状態が想起の内容に影響をおよぼす可能性が指摘されている。そのため、回想と心理的適応との関連については回想から適応への一方的な因果関係を規定するべきではなく、心理的適応が回想におよぼす影響についても含めて検討するべきだと考えられた。

本研究では上述した回想のモダリティによる分

類のうち、個人内回想と対人的回想を取り上げる。そしてこれらの回想は高齢者にとって異なる心理的意義をもつという仮説のもとに、これらの回想行為を測定する尺度を作成し、その特徴の相違について検討を試みる(調査1)。さらに高齢者が日常的に行うこれらの回想が心理的適応にどのような影響を及ぼすのかについて、縦断調査(パネル調査)から得られたデータから検討を試みることを目的とする(調査2)。日常的な回想行為が心理的適応に及ぼす影響を検討する場合には、反対に高齢者の心理的適応が回想の頻度や内容に影響を及ぼす可能性も考えられることから、両者の間には双方向の因果関係が生じる可能性が考えられる。そのため本研究では縦断データに対してFinkel(1995)の交差遅延効果モデル(Cross-lagged effects model)および同時効果モデル(Synchronous effects model)を用いたパス解析(構造方程式モデリング: SEM)を行うことで、回想行為と心理的適応との双方向的な因果関係の検討を試みる。

調査 1

目的

調査1ではわれわれが個人的に過去を想起する行為である個人内回想と、他者に対して過去を語る行為である対人的回想の程度を測定する尺度を作成し、従来の回想に関する指標との関連の検討からそれぞれの回想の特徴の相違を検討し、その妥当性を検証することを目的とした。

方法

調査対象者および手続き 調査対象者は関西圏の都市部であるS市、K市、H市のいずれかに所在するシルバー人材センターに登録する在宅高齢者に対して質問紙調査への回答を有償で依頼し、これに了承した者を調査対象者とした。調査は2009年5月に実施された。対象者との連絡をセンターの担当者に依頼することで匿名による回答とした。対象者はそれぞれS市43名(男性22名、女性21名、平均年齢69.6歳、標準偏差4.7

歳), K市45名(男性18名, 女性27名, 平均年齢70.6歳, 標準偏差4.1歳), H市42名(男性28名, 女性14名, 平均年齢70.6歳, 標準偏差4.0歳)であり, 全体で130名(男性68名, 女性62名, 平均年齢70.3歳, 標準偏差4.3歳)だった。対象者の主観的な健康状態は, 「全く健康でない」2名, 「あまり健康でない」7名, 「普通」64名, 「かなり健康」40名, 「まったく健康」17名だった。対象者の居住形態は, 「ひとり暮らし」23名, 「夫婦のみ」64名, 「家族と同居」41名, その他2名だった。対象者の最終学歴は「中学校」27名, 「高等学校」77名, 「大学または短期大学」20名, その他6名だった。なお回答内容に不備が認められた場合には, 原則としてセンターの担当者を通して回答の訂正をもとめた。そのため有効回答率は100%だった。

質問紙 質問紙は以下の尺度から構成された。

個人内回想および対人的回想を測定するための質問項目は, Taft & Nehrke (1990) と山口(2004, p.34)による質問項目をもとにこれまでの研究(野村, 2008a, 2008b)で収集された以下の6項目を用意した。1. あなたは一人である時にどれ位頻繁に過去を思い出しますか。2. あなたは何かのきっかけでどれ位過去のことを考えますか。3. あなたは普段どれ位よく過去のことを考えますか。4. あなたは誰かと一緒にいる時にどれ位過去のことを話しますか。5. あなたは自分から誰かに過去のことを話しますか。6. あなたは過去のことが話題になればどれ位思い出を話しますか。

選択肢は, まったく思い出さない(項目1)/考えない(項目2,3)/話さない(項目4-6)(1点)～よく思い出す(項目1)/考える(項目2,3)/話す(項目4-6)(5点)の5件法とした。

その他の回想に関する尺度は, 回想にともなうポジティブまたはネガティブな感情や認知の程度を測る肯定的回想尺度と否定的回想尺度の短縮版(野村・橋本, 2001; いずれも6項目)と, 回想において自ら過去を積極的に評価しようと試みる程度を測る再評価傾向尺度(野村・橋本, 2001)に加えて, 日常場面全般における回想の頻度を測る回想尺度(長田・長田, 1994)を妥当性の検討

のために用いた。回想尺度では「ひとりであるとき」「寂しさを感じたとき」などの8項目について, 「よく考える」から「考えない」の4件法で回答をもとめた。

心理的適応の指標には人生満足度(Life Satisfaction Index-A; Neugarten, et al., 1961)の日本版(和田, 1981)に野村・橋本(2001)が独自に修正を行った10項目¹⁾に加えて, 短縮版老年うつ尺度(Geriatric Depression scale; Sheikh & Yesavage, 1986, Niino, et al., 1991)と自尊感情尺度(Rosenberg, 1965, 山本ほか, 1982)を用いた。分析には統計パッケージのIBM SPSS Statistics ver. 20.0を用いた。

倫理的配慮 本研究を実施するにあたり, 調査対象者には調査への参加は任意であり, 調査項目の確認後でも参加を取り消すことが出来ること, また調査結果は個人のプライバシーを遵守して統計的な分析のみを行い, 個人の回答内容を外部に漏らすことはないことを担当者を通して伝えた。

結果と考察

個人内回想および対人的回想を測定する6項目にたいして, 主因子法・プロマックス回転による因子分析を固有値1を基準として行った。その結果, 因子負荷量が.40以下の項目は認められず, 項目1から3と項目4から6からなる2因子構造が認められた。2因子の固有値はそれぞれ3.25と1.01であり, 累積寄与率は71.04%だった。各因子の内的整合性を示すCronbachの α 係数は個人内回想では.860, 対人的回想では.713であり, それぞれ尺度として利用可能だと判断された。個人内回想および対人的回想尺度の質問項目, 因子負荷量および共通性をそれぞれTable1とTable2に示した。

回答内容の性差を検討したところ, 年齢で性差が認められ($t(128)=2.29, p<.05$), 男性の平均年齢は女性よりも高かった(男性=71.07歳 \pm 3.89; 女性=69.35歳 \pm 4.66)。また長田・長田(1994)の回想尺度と抑うつ度においてのみ性差が認められ, 高齢者の男性は女性よりも日常場面でより頻繁に回想を行い($t(127)=2.15, p<.05$),

Table 1 個人内回想尺度の質問項目、因子負荷量および共通性

No.	質問項目	因子負荷量	共通性
1	あなたは一人でいる時にどれ位頻繁に過去を思い出しますか。	.758	.581
2	あなたは何かのきっかけでどれ位過去のことを考えますか。	.926	.817
3	あなたは普段どれ位よく過去のことを考えますか。	.746	.642

注. 固有値 3.25, 寄与率 54.2%, Cronbach の α 係数 .860

Table 2 対人的回想尺度の質問項目、因子負荷量および共通性

No.	質問項目	因子負荷量	共通性
4	あなたは誰かと一緒にいる時にどれ位過去のことを話しますか。	.520	.379
5	あなたは自分から誰かに過去のことを話しますか。	.787	.581
6	あなたは過去のことが話題になった時にどれ位思い出を話しますか。	.654	.435

注. 固有値 1.01, 寄与率 16.8%, Cronbach の α 係数 .713

Table 3 回想および心理的適応指標間の相関

	個人内回想	対人的回想	肯定的回想	否定的回想	再評価傾向	回想の頻度	人生満足度	自尊感情度
対人的回想	.522***							
肯定的回想	.129	.205*						
否定的回想	.303***	.058	-.143					
再評価傾向	.134	.132	.211*	.108				
回想の頻度	.492***	.312***	.173*	.411***	.103			
人生満足度	-.047	.069	.121	-.131	.269**	-.218*		
自尊感情度	.081	.204*	.142	-.112	.179*	-.263**	.520***	
抑うつ度	-.022	-.154	-.199*	.125	-.195*	.303**	-.725***	-.692***

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

女性よりもうつ傾向が高かった ($t(127) = 2.21$, $p<.05$)。

測定したすべての指標の相関をもとめて Table 3 に示した。個人内回想と対人的回想には中程度の正の相関 ($r=.522$, $p<.001$) が認められた。個人内回想は否定的回想 ($r=.303$, $p<.001$) と回想の頻度 ($r=.492$, $p<.001$) と有意な正の相関が、対人的回想は肯定的回想 ($r=.205$, $p<.05$) と回想の頻度 ($r=.312$, $p<.001$)、自尊感情 ($r=.204$, $p<.05$) と有意な正の相関が認められた。回想の頻度は上記の他に肯定的回想 ($r=.173$, $p<.05$)、否定的回想 ($r=.411$, $p<.001$)、そして3つの適応指標とも有意な相関が認められた (人生満足度: $r=-.218$, $p<.05$; 自尊感情度: $r=-.263$, $p<.01$; 抑うつ度: $r=.303$, $p<.01$)。

この結果より、本研究で作成した個人内回想および対人的回想尺度はいずれも日常場面の回想の頻度と有意な相関があり、その尺度間にも有意な相関があるものの、過去をひとりで思い出すること (個人内回想) は回想にともなうネガティブな感情と関連し、回想を他者に語ること (対人的回想) は回想にともなうポジティブな感情や自尊感情の程度と関連すると考えられ、それぞれやや異なる心理的意義をもつ行為であると考えられた。

回想の頻度 (長田・長田, 1994) では個人内回想と対人的回想は区別されていないものの、「ひとりでいるとき」や「寝るときや眠れないとき」などの場面では個人内での回想を想定しており、「よく考える」から「考えない」という選択肢からも基本的には個人内回想を測る尺度であると考え

えられる。また個人内回想と回想の頻度ではともに回想におけるネガティブな感情と有意な正の相関が認められている。

回想の頻度はすべての適応指標と有意な相関を示し、頻繁な回想が心理的適応の低さと関連すると考えられたものの、個人内回想と心理的適応との有意な相関は認められなかった。この結果の違いの理由のひとつに、それぞれの尺度の質問項目で尋ねられている内容の違いが考えられる。長田・長田（1994）の回想尺度では自然に回想が起りやすい場面が設定されているが、質問項目には「寂しさを感じた」「何かで悩んでいる」「嫌な思いをした」などのネガティブな感情や心理状態を示す表現が多く含まれている。そのためこれらの項目から測られた回想の頻度は心理的適応の低さとより関連しやすい可能性がある。その一方、個人内回想尺度が測定する個人がひとりで過去を想起する程度はそれ自体では心理的適応とは必ずしも関連しなかった。これに対して対人的回想は自尊感情の高さと有意な相関を示した。この結果は、個人内回想と主観的幸福感との間で負の相関を認め、対人交流的回想とは有意な相関を認めなかった山口（2004）の結果とは厳密には一致しないものの、本研究で認められた相関関係とは必ずしも矛盾しないと考えられた。

調査 2

目的

調査2では、調査1で作成した尺度を用いて、高齢者が日常的に行う個人内回想および対人的回想の程度が心理的適応に及ぼす影響について検討する。その際、回想と心理的適応との間には双方向の因果関係が生じる可能性が考えられるため、調査1の対象者に引き続いて縦断調査への協力をもとめ、その結果に対してFinkel（1995）の交差遅延効果モデルおよび同時効果モデルを用いたパス解析を行う。

交差遅延効果モデルは2時点間の縦断データを用いて、初回調査時の2つの変数の値が追跡調査時における両変数の変化に影響を及ぼすかどうか

を検討するモデルとされ、双方向の因果関係の検討に用いられる基本的な分析モデルとされる（岡林・杉澤・岸野，1998；岡林，2006；高比良・安藤・坂元，2006）。これに対して、それぞれの因果関係が同時に影響を及ぼしている可能性が考えられる場合には同時効果モデル（Synchronous effects model）を用いることが可能だとされる。同時効果モデルでは同一時点での因果関係が検討されるが、交差遅延モデルによる分析では初回調査と追跡調査の期間が本来の因果関係が生じる期間よりも長すぎると影響が認められない可能性があるため（岡林，2006，p. 80）後者のモデルを利用することがふさわしいと言える。

本研究では後述する理由から2回の質問紙調査の間隔を2ヶ月間に設定したが、日常場面における回想と心理的適応との因果関係が生じる期間について理論的な前提があるわけではない。そこで交差遅延効果モデルと同時効果モデルをいずれも用いて分析を行い、両者の分析結果を比較することで双方向の因果関係について検討を試みた。

方法

調査対象者および手続き 調査1における調査対象者である関西圏のS市、K市、H市のいずれかに所在するシルバー人材センターに登録する在宅高齢者に対して、その2ヶ月後の2009年7月に再びセンターの担当者を通して質問紙調査を依頼し郵送にて回収した。調査1および調査2の間隔は（回想のモダリティの療法的回想にあたる）対人援助手段である回想法が6～8週間を1クールとして実施されることが多いことから、それらの介入効果と比較可能性を考慮して2ヵ月間に設定した。調査への参加を承諾した130名（男性68名、女性62名、平均年齢70.3歳、標準偏差4.3歳）を分析の対象とした。調査1の回答以降に強いストレスを感じる困難な出来事の実験の有無を尋ねたところ、「まったくなかった」40名、「あまりなかった」38名、「ときどきあった」43名、「よくあった」9名だった。対象者には調査1と調査2への協力を併せて依頼し、調査1と同様に回答内容に不備が認められた場合には回答の修

正をもとめたため、調査2の有効回収率は100%だった。

質問紙 調査1で作成した、各3項目5件法からなる個人内回想および対人的回想尺度を用いた。その他の回想に関する尺度は、調査1と同じく肯定的回想尺度と否定的回想尺度の短縮版（野村・橋本, 2001）と再評価傾向尺度（野村・橋本, 2001）を使用した。心理的適応指標には人生満足度（Life Satisfaction Index-A；Neugarten, et al., 1961）の日本版（和田, 1981）を独自に修正した10項目、短縮版老年うつ尺度（Geriatric Depression scale；Sheikh & Yesavage, 1986, Niino, et al., 1991）および自尊感情尺度（Rosenberg, 1965, 山本ほか, 1982）を用いた。分析には統計パッケージのIBM SPSS Amos ver.23.0を用いた。

結果

日常的な回想行為と心理的適応との双方向の因果関係を検討するため、Finkel（1995）の交差遅延効果モデルおよび同時効果モデルを用いたパス解析を行った。

分析では調査1における相関分析の結果、（回想の頻度との相関は除いて）有意な相関が認められた対人的回想と自尊感情度、肯定的回想と抑うつ度、再評価傾向と人生満足度、自尊感情度、抑うつ度の組み合わせを選択して個別に分析を行った。分析にあたっては識別性の問題を回避するため2時点目の誤差変数間の共変動を0に固定する制約を行った（山本・小野寺, 2002, p.16）。

分析の結果、対人的回想と自尊感情度を選択したモデルでは（Figure 1 参照）、同時効果モデルと交差遅延効果モデルのいずれも対人的回想から自尊感情度への有意な影響は認められなかったのに対して（同時効果モデル： $\beta = -.019$, n.s.；交差遅延効果モデル： $\beta = .005$, n.s.）、自尊感情度から対人的回想への影響はいずれも有意だった（同時効果モデル： $\beta = .259$, $p < .01$ ；交差遅延効果モデル： $\beta = .201$, $p < .01$ ）。モデルの適合度は χ^2 値と Goodness of Fit Index（GFI）、Adjusted goodness of fit index（AGFI）、Root Mean

Square Error of Approximation（RMSEA）を用いて検討した。同時効果モデル（ $\chi^2(1) = 0.095$ GFI=1.000 AGFI=0.996 RMSEA=.000）ではいずれの指標も良好だった一方、交差遅延効果モデルでは全体として適合度指標は良好ではなかった（ $\chi^2(1) = 4.010$ GFI=0.985 AGFI=0.847 RMSEA = .154）。

肯定的回想と抑うつ度を選択したモデルでは（Figure 2 参照）、同時効果モデルと交差遅延効果モデルのいずれも肯定的回想から抑うつ度への有意な影響は認められなかった（同時効果モデル： $\beta = .114$, n.s.；交差遅延効果モデル： $\beta = .029$, n.s.）。その一方で抑うつ度から肯定的回想への影響は同時効果モデルでは有意傾向であり（ $\beta = -.162$, $p < .10$ ）、交差遅延効果モデルでは有意だった（ $\beta = -.149$, $p < .05$ ）。モデルの適合度指標はいずれのモデルも χ^2 値は有意でないものの、その他の適合度指標は良好であった（同時効果モデル： $\chi^2(1) = 0.686$ GFI=0.997 AGFI=.973 RMSEA=.000；交差遅延効果モデル： $\chi^2(1) = 0.256$ GFI=0.999 AGFI=0.990 RMSEA = .000）。

再評価傾向と人生満足度を選択したモデルでは、同時効果モデルと交差遅延効果モデルのいずれも再評価傾向から人生満足度への影響が有意だった（同時効果モデル： $\beta = .298$, $p < .001$ ；交差遅延効果モデル： $\beta = .259$, $p < .001$ ）。これに対して人生満足度から再評価傾向への影響はいずれのモデルでも有意ではなかった（同時効果モデル： $\beta = -.087$, n.s.；交差遅延効果モデル： $\beta = .005$, n.s.）。モデルの適合度指標はいずれのモデルも良好ではなかった（同時効果モデル： $\chi^2(1) = 2.252$ GFI=0.981 AGFI=0.814 RMSEA=.146；交差遅延効果モデル： $\chi^2(1) = 3.157$ GFI=0.975 AGFI=0.746 RMSEA=.191）。

再評価傾向と抑うつ度を選択したモデルでは、同時効果モデルと交差遅延効果モデルで共通して再評価傾向から抑うつ度への影響は有意または有意傾向であり（同時効果モデル： $\beta = -.149$, $p < .10$ ；交差遅延効果モデル： $\beta = -.174$, $p < .05$ ）、抑うつ度から再評価傾向への影響は有意ではなかった（同時効果モデル： $\beta = -.011$, n.s.；交差

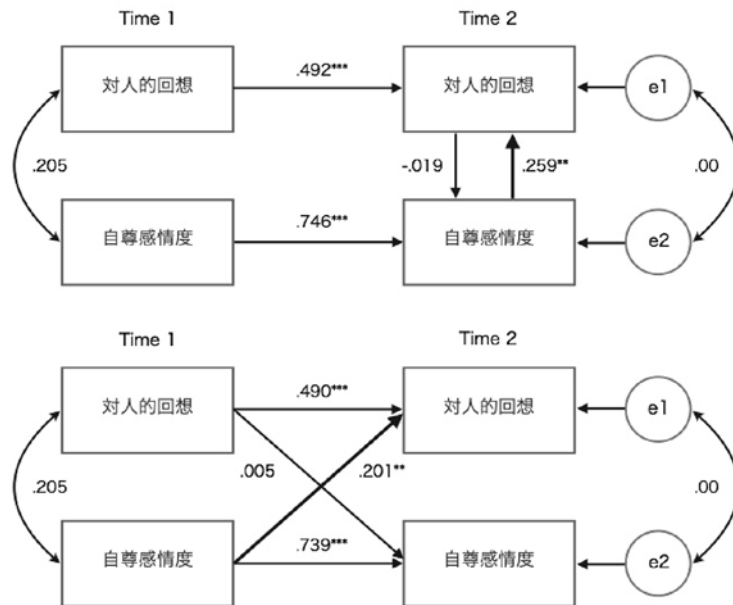


Figure 1 対人的回想および自尊感情度におけるパスダイアグラム
 注. 数値は標準偏回帰係数 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$
 上図は同時効果モデル $\chi^2(1) = 0.095$ GFI=1.000 AGFI=0.996 RMSEA=.000
 下図は交差遅延効果モデル $\chi^2(1) = 4.010$ GFI=0.985 AGFI=0.847 RMSEA = .154

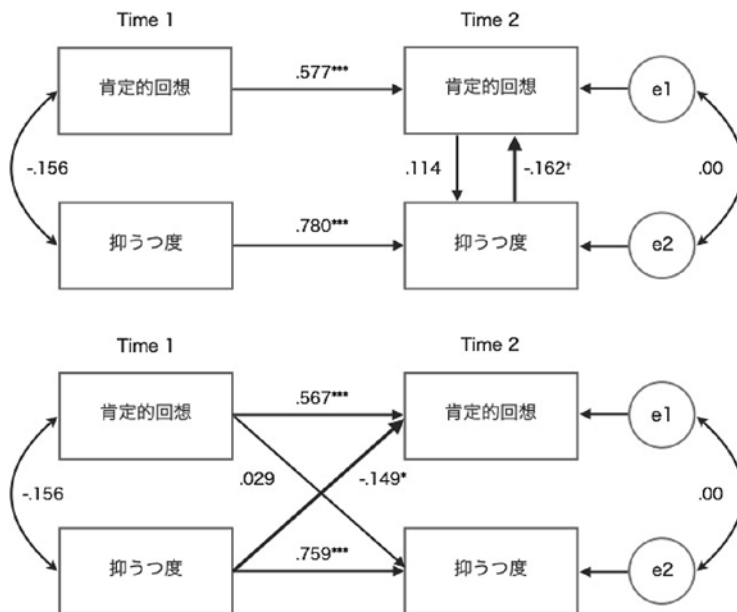


Figure 2 肯定的回想および抑うつ度におけるパスダイアグラム
 数値は標準偏回帰係数 † $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$
 上図は同時効果モデル $\chi^2(1) = 0.686$ GFI=0.997 AGFI=.973 RMSEA=.000
 下図は交差遅延効果モデル $\chi^2(1) = 0.256$ GFI=0.999 AGFI=0.990 RMSEA = .000

遅延効果モデル： $\beta = -.075$, n.s.）。モデルの適合度指標は同時効果モデルでは全体として良好ではなかったが（ $\chi^2(1) = 2.372$ GFI=0.980 AGFI=.805 RMSEA=.152），交差遅延効果モデルではいずれの指標も良好だった（ $\chi^2(1) = 0.591$ GFI=0.995 AGFI=0.950 RMSEA = .000）。

再評価傾向と自尊感情度を選択したモデルでは、同時効果モデルと交差遅延効果モデルのいずれも再評価傾向から自尊感情度への影響は有意でなく（同時効果モデル： $\beta = -.066$, n.s.；交差遅延効果モデル： $\beta = -.041$, n.s.），自尊感情度から再評価傾向への影響（同時効果モデル： $\beta = -.007$, n.s.；交差遅延効果モデル： $\beta = -.005$, n.s.）も有意でなかった。モデルの適合度指標はいずれのモデルも良好だった（交差遅延効果モデル： $\chi^2(1) = 0.000$ GFI=1.000 AGFI=1.000 RMSEA=.000；交差遅延効果モデル： $\chi^2(1) = 0.397$ GFI=0.997 AGFI=0.967 RMSEA=.000）。

総合考察

本研究では過去を想起する行為である個人内回想と他者に対して過去を語る行為である対人的回想を区別し、両者は高齢者にとって異なる心理的意義をもつという仮説のもとに、それぞれを測定する尺度を作成してその妥当性を検討した。そのうえで日常場面で行われる高齢者の回想が心理的適応に及ぼす影響について、縦断データを用いたパス解析により双方向の因果関係の検討を試みた。

尺度間の相関では、個人内回想と対人的回想は回想にともなう感情の程度との間で異なる関連が認められ、個人内回想はネガティブな感情と有意な相関が、対人的回想はポジティブな感情と有意な相関が認められた。また個人内回想と心理的適応の間には有意な相関は認められなかったが、対人的回想は自尊感情度と有意な相関が認められた。

また実際には個人内回想に相当する回想の頻度（長田・長田，1994）と個人内回想は他の回想に関する尺度との間で類似した相関が認められ、本

研究で作成した尺度は利用可能な程度の妥当性をもつと考えられた。しかしながら個人内回想は心理的適応の低さと関連せず、その点では長田・長田（1994）や山口（2004）の結果と十分に一致しなかった。その理由として、長田・長田（1994）による回想尺度では回想が生じやすい場面としてネガティブな心理状態を示す表現が多く含まれることから、回想と心理的適応の低さの関連が生じやすい可能性が考えられた。また山口（2004）の研究では個人内回想が1項目のみで検討され、使用された心理的適応の指標も本研究とは異なるため、本研究の結果との違いについて断定的に論じることが出来ない。限られた既存の尺度との相関から併存的妥当性を検討するだけでは尺度の妥当性の検討は充分とは言えないため、今後は回想の機能（Webster, 1993, 1997；瀧川・仲，2010）との関連の検討や、高齢者に限らないより大規模なサンプルを用いた検討を行うことで妥当性の検討を行うことが望ましい。

調査2のパス解析の結果からは対人的回想と自尊満足度間に有意な影響が認められ、対人的回想が自尊満足度に影響を及ぼすのではなく、むしろ自尊満足度による影響が対人的回想が受けていると考えられた。この結果からは人生満足度が高い高齢者はそうでない者よりも日常的に回想を他者に語ることが多いが、日常場面で回想を他者にすることによって人生満足度が高まるとは言えないと考えられた。言い換えれば、この結果は人生満足度の低い高齢者は自らの過去を人には語りたがらないことを示している。一般に高齢者は過去を語ることを好むと考えられているが、過去を他者に語る行為は高齢者に広く認められるのではなく、過去を語ることを好まない高齢者もいることがこの結果からは示唆された。

肯定的回想と抑うつ度の間にも有意な影響が認められたが、上記の結果と同様に肯定的回想が抑うつ度に影響を及ぼすのではなく、抑うつ度による影響を肯定的回想が受けると考えられた。日常場面で行われる回想ではポジティブな感情をとともなう回想を行うことが抑うつ度を軽減するとは言えず、反対に抑うつ傾向の高さは過去を想起

してもポジティブ感情が生じにくくなる影響を及ぼすと考えられた。これらの結果と異なり、過去を積極的に評価しようと試みる程度にあたる再評価傾向は人生満足度や抑うつ度に有意な影響を及ぼすと考えられた。しかしながらモデルの適合度は概してあまり良好ではなかった。再評価傾向はライフレビューにおける構成要素である過去の評価に高齢者が取り組む程度を測定する尺度だが（野村・橋本，2001，p.77），本研究で取り上げた回想の指標では唯一心理的適応に影響を及ぼす可能性が示唆された。

前述した「回想のモダリティ」という観点に立てば、これらの結果は対人援助手段である回想法や療法的回想の意義を否定するものではなく、むしろその有効性を示唆するものとも言える。もしも個人内回想を含むあらゆる回想が高齢者の心理的適応を高める効果をもつならば、対人援助手段としての回想法の有用性は決して高いとはいえない。高齢者が日常的に行う回想は必ずしも心理的適応を高めるとは限らず、心理的適応の良好でない高齢者が自らの過去を積極的に語ることは多くないという本研究の結果は、そうした高齢者に対して過去を語る機会を提供し、彼らが語る回想に耳を傾けることが対人援助手段として有効であることを示唆している。

自らの過去を想起することとそれを他者に語ることの違いのひとつに、過去の想起は他者の存在を必要としない一方で、語るという行為は聴き手の存在を前提としていることがある。そのため想起された回想のうち他者に語られるものはその一部に過ぎない。自己物語について論考した浅野（2001，p.96）は、人々によって語られる物語は実際に生きられた経験と比べて相対的に単純で有限であると指摘している。浅野は人々が自己について語るときに多く経験が「語り得ないもの」²⁾として取り上げられないことを指摘したが（浅野，2001，p.97），こうした考えは高齢者が語る回想にもあてはまるだろう。

また想起される事象にはイメージなどの視覚的情報なども含まれるが、我々はそうした事象をありのまま扱うことは出来ず、何らかの言語表現に

置き換えることではじめて他者に語ることが出来る。このような想起された事象の言語表現への置き換えプロセスは、必然的に語り手が過去の経験を解釈したり、想起された経験のうちの何を語るべきで何を語るべきでないかという取捨選択を行う機会となると考えられる。例えば怒りや悲しみといったネガティブな感情をともなう経験はしばしば想起されても語られない場合がある。

やまだ（2000，p.5）は、われわれは自らの経験を語ることで日々の行動を構成し、経験として組織化し、それを意味づけながら生きていと述べ、語りという行為がもつ経験を組織化する役割を指摘した（やまだ，2000，p.3）。野村（2008）は心理療法場面を手掛かりにして自己について語ることと想起することの違いについて論じ、自己を語ることは経験を組織化し、人生を意味づけ、自我同一性を維持する役割を持つと述べている。これらの指摘より、過去を人に語ることは想起することよりも本人がより能動的に関与することが可能な行為であり、自らの経験を意味づけて解釈するプロセスとして捉えることが出来るだろう。

高齢者が自らの過去の人生を振り返って受容することは自我の統合を促進する具体的な手段だとされるが（Erikson et al., 1990, pp.74-75），ネガティブな感情をともなう回想されやすい個人内回想は、対人的回想や（本研究では検討されていない）療法的回想と比べて回想を通して過去の人生を受容することが容易ではない可能性がある。高齢者が回想において過去の人生を受容するために重要な役割を果たすのは、単に「過去を想起すること」ではなく「思い出を他者に語ること」なのではないだろうか。

本研究の課題と今後の展望 本研究では十分に検討できなかったことのひとつに、パス解析におけるモデルの適合度が充分に良好ではない結果がしばしば認められたことが挙げられる。パス解析の結果からは高齢者の自尊感情度が対人的回想の頻度に影響を及ぼす可能性が認められたが、モデルの適合度は同時効果モデルでは良好だったが交差遅延効果モデルでは充分に良好ではなかった。そのためこれらの因果関係は1回目と2回目の調査

時点の間に生じた影響というよりも、同時点において生じる影響として捉えるほうがより妥当だと考えられた。本研究では回想と心理的適応との双方向の因果関係を検討するためにふたつのモデルによるパス解析の結果を比較したが、いずれのモデルの適合度も良好であった場合は少なく、多くの場合どちらかのモデルの適合度は良好ではなかった。また全てのパス解析の結果で一貫して同時効果モデルの適合度が良好だったわけではなく、なかには交差遅延効果モデルの適合度の方が良好である場合も認められた。そのため今後もより良好な因果関係のモデルを確認するための検討を重ねることが必要だと言える。

本研究では自らの過去を想起する個人内回想と他者に対して過去を語る行為である対人的回想との心理的な意義の違いを検討したが、前述した「回想のモデリティ（野村・山田，2004）」という観点に立てば、高齢者の対人援助手段として実践される療法的回想とこれらふたつの回想との違いについても検討する必要があるだろう。日常場面で高齢者により想起されて語られる回想と、回想法の実践場面で語られる回想がどのように異なるかを検討することは、対人援助手段としての回想法の有用性や心理的効果を検討するためにも重要だと言える。

付記

本研究の一部は日本健康心理学会第22回大会（於：玉川大学）および日本パーソナリティ心理学会第19回大会（於：慶應義塾大学）において報告した内容に加筆修正を行ったものである。

本研究は平成20-21年度科学研究補助金（若手研究B）課題番号：23730671により行われた。

本研究を行うにあたり、明星大学心理学部 岡村秀樹先生と明治学院大学心理学部 川端一光先生より貴重なアドバイスをいただいた。ここに記してお礼申し上げる。

注

- 1) 本研究では、和田（1981）による日本版人生満足度（LSI-A）の項目に対する野村・橋本（2001）分析において、尺度一項目間相関の低い項目を削除した10項目を使用した。また選択肢は、はい、いいえ、どちらでもないの3段階評定とした。

- 2) 浅野（2001）は自己物語について「それを通して自己の様々な経験が構造化され意味を与えられるような語り」であり、自己の構造や一貫性はそのなかで生み出されて維持されるのに対して、「語り得ないもの」とはそうした構造や一貫性や意味に亀裂を入れる危険な要素だとした（浅野，2001，p.110）。

引用文献

- 浅野智彦. (2001) 自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ. 東京：勁草書房.
- Brennan, P. L., & Steinberg, L. D. (1984). Is reminiscing adaptive?: Relations among social activity level, reminiscence and morale. *International Journal of Aging and Human Development*, 18, 99-110.
- Butler, R. N. (1963). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65-76.
- Coleman, P.G. (1986). *Ageing and reminiscence processes: Social and clinical implications*. New York: John Wiley & Sons.
- Erikson, E. H. (1977・1980). 幼児期と社会1・2（仁科弥生，訳）. 東京：みすず書房. (Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1990). 老年期：生き生きしたかかわりあい（朝長正徳・朝長梨枝子，訳）. 東京：みすず書房. (Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. W. W. Norton.)
- 遠藤英俊. (2005). いつでもどこでも「回想法」：高齢者介護予防プログラム. 東京：ごま書房.
- Haight, B. K., & Dias, J. K. (1992). Examining key variables in selected reminiscing modalities. *International Psychogeriatrics*, 4, 279-290.
- Haight, B. K. & Webster, J. D. (1995). *The art and science of reminiscing: Theory, research, methods, and applications*. Bristol, PA: Taylor & Francis.
- Haight, B. K. & Hendrix, S. (1999). An integrated review of reminiscence. In Haight, B. K. & Webster, J. D., eds., *The art and science of reminiscing: Theory, research, methods, and applications*. (pp.3-21). Bristol, PA: Taylor & Francis.
- 黒川由紀子 (2005). 回想法：高齢者の心理療法. 東京：誠信書房.
- Lewis, M. I., & Butler, R. N. (1974). Life review therapy: Putting memories to work in individual and group psychotherapy. *Geriatrics*, 29, 165-173.
- LoGerfo, M. (1980). Three ways of reminiscence in theory and practice. *International Journal of Aging and Human Development*, 12, 39-48.

- Molinari, V., & Reichlin, R. E. (1985). Life review reminiscence in the elderly: A review of the literature. *International Journal of Aging and Human Development*, 20, 81-92.
- Neugarten, B. L., Havighurst, R. J., & Tobin, S. S. (1961). The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology*, 16, 134-143.
- Niino, N., Imaizumi, T. & Kawakami, N. (1991). A Japanese translation of the Geriatric Depression scale. *Clinical Gerontologist*, 10, 85-87.
- Nolen-Hoeksema, S. (1991). Responses to depression and their effects on the duration of depressive episodes. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 569-582.
- 野村晴夫. (2008) 自己を語ることと想起すること：心理療法場面を手掛かりとしたその機能連関の探索. 心理学評論, 51, 99-113.
- 野村信威. (2008a). 青年期における回想と自我状態との関連. 日本健康心理学会第21回大会発表論文集, 11.
- 野村信威. (2008b). 高齢者における回想の質と適応との関連について (15): グループ回想法の効果評価における個別検討の意義. 日本心理学会第72回大会発表論文集, 882.
- 野村信威. (2018). 在宅高齢者におけるグループ回想法の認知症予防効果. 高齢者のケアと行動科学, 23, 11-21.
- 野村信威・橋本 幸. (2001). 老年期における回想の質と適応との関連. 発達心理学研究, 12, 75-86.
- 野村信威・橋本 幸. (2006). 地域在住高齢者に対するグループ回想法の試み. 心理学研究, 77, 32-39.
- 野村信威・山田富美雄. (2004). 高齢者に対する回想法の効果評価研究の展望: Evidence Based Medicine (実証に基づく医療) の観点から. ストレスマネジメント研究, 2, 71-78.
- 野村豊子. (1998). 回想法とライフレビュー: その理論と技法. 東京: 中央法規出版.
- 岡林秀樹. (2006). 発達研究における問題点と縦断データの解析方法. パーソナリティ研究, 15, 76-86.
- 岡林秀樹・杉澤秀博・岸野洋久. (1998). お年寄りの健康と人とのふれあい. 豊田秀樹 (編), 共分散構造分析 (事例編) (pp.83-90). 京都: 北大路書房.
- 長田由紀子・長田久雄. (1994). 高齢者の回想と適応に関する研究. 発達心理学研究, 5, 1-10.
- Taft, L. B., & Nehrke, M. F. (1990). Reminiscence, life review, and ego integrity in nursing home residents. *International Journal of Aging and Human Development*, 30, 189-196.
- 高比良美詠子・安藤玲子・坂元 章. (2006). 縦断調査による因果関係の推定: インターネット使用と攻撃性の関係. パーソナリティ研究, 15, 87-102.
- 瀧川真也・仲真紀子. (2010). 日本語版 Reminiscence Functions Scale (RFS) 作成の試み (1) 日本心理学会第74回大会発表論文集, 832.
- Thornton, S., & Brotchie, J. (1987). Reminiscence: A critical review of the empirical literature. *British Journal of Clinical Psychology*, 26, 93-111.
- 筒井美加. (2000). 自己関連の情報処理における気分一致効果: 自伝的想起課題による検討. 心理学研究, 71, 281-288.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子. (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山口智子. (2004). 人生の語りの発達臨床心理. 京都: ナカニシヤ出版.
- やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味: ライフストーリーの心理学. やまだようこ (編著) 人生を物語る: 生成のライフストーリー (pp. 1-38). ミネルヴァ書房.
- 山本喜一郎・小野寺孝義. (2002). Amos による共分散構造分析と解析事例 第2版 (p.16). 京都: ナカニシヤ出版.
- 和田修一. (1981). 人生満足度尺度の分析. 社会老年学, 14, 21-35.
- Webster, J. D. (1993). Construction and validation of the Reminiscence Function scale. *Journal of Gerontology*, 48, 256-262.
- Webster, J. D. (1997). The Reminiscence Function scale: A replication. *International Journal of Aging and Human Development*, 44, 137-148.
- Wong, P. T. P. & Watt, L. M. (1991). What Types of Reminiscence Are Associated With Successful Aging? *Psychology and Aging*, 8, 272-279.

Reminiscence modalities: Differences in older adults' recall and narration about their past

Nobutake NOMURA, Ph.D
(Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University)

Abstract

A scale was developed based on the idea of modalities of reminiscence to assess the frequency of intra-personal reminiscence, i.e. a personal, mental reminiscence activity, and interpersonal reminiscence, i.e. an oral reminiscence activity conducted with others. Then, the differences between the two types of reminiscence activities, as well as causal relationships between the two activities and psychological well-being, were investigated using longitudinal data of community-living older adults (N=130). A scale comprising two factors and six items was developed using these data. Correlation analyses indicated significant correlations between intra-reminiscence and negative feelings in reminiscence and between interpersonal reminiscence and positive feelings in reminiscence, suggesting that these reminiscence activities were differently related to well-being. The results of path analyses using cross-lagged and synchronous effects models (Finkel, 1995) indicated that the indices of psychological well-being significantly influenced the frequency of interpersonal reminiscence and positive feelings in reminiscence. This finding suggests that older adults with lower levels of well-being might dislike narrating their past.

Keywords: Reminiscence, Reminiscence therapy, Life review, Older adults, Path analysis